1.8［火］

第618回 名曲シリーズ
サントリーホール／19時開演

Popular Series, No. 618
Tuesday, 8th January, 19:00 / Suntory Hall

指揮／山田和樹（首席客演指揮者） Principal Guest Conductor KAZUKI YAMADA P. 6

チェロ／ニコラ・アルトシュテット Cello NICOLAS ALTSTAEDT P. 8

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

サン=サーンス **交響曲 第3番** ハ短調 作品78 **〈オルガン付き〉**［約36分］ P.10
SAINT-SAËNS / Symphony No. 3 in C minor, op. 78 "Organ"

Ⅰ. Adagio – Allegro moderato – Poco adagio
Ⅱ. Scherzo : Allegro moderato – Presto – Maestoso – Allegro
オルガン：室住素子

［休憩　Intermission］

ラロ **チェロ協奏曲** ニ短調［約26分］ P.11
LALO / Cello Concerto in D minor

Ⅰ. Lento – Allegro maestoso
Ⅱ. Intermezzo : Andantino con moto – Allegro presto
Ⅲ. Andante – Allegro vivace

レスピーギ **交響詩〈ローマの祭〉**［約24分］ P.12
RESPIGHI / Feste Romane

Ⅰ. チルチェンセス – Ⅱ. 50年祭 – Ⅲ. 10月祭 – Ⅳ. 主顕祭

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［協賛］NTTコミュニケーションズ株式会社
［助成］文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

1.12［土］

第213回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール／14時開演

Saturday Matinée Series, No. 213
Saturday, 12th January, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

1.13［日］

第213回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール／14時開演

Sunday Matinée Series, No. 213
Sunday, 13th January, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／山田和樹（首席客演指揮者） Principal Guest Conductor KAZUKI YAMADA P. 6

ピアノ／ホアキン・アチュカロ Piano JOAQUÍN ACHÚCARRO P. 8

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ラヴェル **高雅で感傷的なワルツ**［約16分］ P.14
RAVEL / Valses nobles et sentimentales

ラヴェル **ピアノ協奏曲** ト長調［約23分］ P.15
RAVEL / Piano Concerto in G major

Ⅰ. Allegramente
Ⅱ. Adagio assai
Ⅲ. Presto

［休憩　Intermission］

リムスキー=コルサコフ **交響組曲〈シェエラザード〉** 作品35［約42分］ P.16
RIMSKY-KORSAKOV / Scheherazade, op. 35

Ⅰ. 海とシンドバッドの船
Ⅱ. カランダール王子の物語
Ⅲ. 若い王子と王女
Ⅳ. バグダッドの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破、終曲

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［共催］東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
［助成］文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

芸劇ジュニア・アンサンブル・アカデミー　プレコンサート
1月13日（日）の《第213回 日曜マチネーシリーズ》では、開演前の13:35から、「芸劇ジュニア・アンサンブル・アカデミー」の受講生によるプレコンサートをコンサートホールで開催します。

1.18［金］ 第584回 定期演奏会 サントリーホール／19時開演

Subscription Concert, No. 584
Friday, 18th January, 19:00 / Suntory Hall

指揮／山田和樹（首席客演指揮者） Principal Guest Conductor KAZUKI YAMADA P. 6

ピアノ／小菅 優 Piano YU KOSUGE P. 9

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

諸井三郎 **交響的断章**［約14分］ P.18
SABURO MOROI / Symphonic Fragments

藤倉 大 **ピアノ協奏曲 第3番〈インパルス〉**
（モンテカルロ・フィル、スイス・ロマンド管との共同委嘱／日本初演）［約24分］ P.19
DAI FUJIKURA / Piano Concerto No. 3 "IMPULSE"
(YNSO co-commission, Japan premiere)

［休憩 Intermission］

ワーグナー **舞台神聖祭典劇〈パルジファル〉から 第1幕への前奏曲**［約13分］ P.20
WAGNER / "Parsifal" Prelude to Act 1

スクリャービン **交響曲 第4番〈法悦の詩〉** 作品54［約22分］ P.21
SCRIABIN / Symphony No. 4 "Le poème de l'extase" op. 54

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［助成］文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
公益財団法人 花王 芸術・科学財団
公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション
［協力］アフラック

※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

1.31［木］ 非破壊検査 Presents 第22回 大阪定期演奏会 フェスティバルホール／19時開演

Subscription Concert in Osaka, No. 22, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd
Thursday, 31st January, 19:00 / Festival Hall

指揮／サッシャ・ゲッツェル Conductor SASCHA GOETZEL P. 7

ピアノ／小曽根 真 Piano MAKOTO OZONE P. 9

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ワーグナー **楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉 第1幕への前奏曲**［約9分］ P.22
WAGNER / "Die Meistersinger von Nürnberg" Prelude to Act 1

モーツァルト **ピアノ協奏曲 第23番** イ長調 K.488［約30分］ P.23
MOZART / Piano Concerto No. 23 in A major, K. 488
Ⅰ. Allegro
Ⅱ. Adagio
Ⅲ. Allegro assai

［休憩 Intermission］

ブラームス **交響曲 第1番** ハ短調 作品68［約45分］ P.24
BRAHMS / Symphony No. 1 in C minor, op. 68
Ⅰ. Un poco sostenuto - Allegro
Ⅱ. Andante sostenuto
Ⅲ. Un poco allegretto e grazioso
Ⅳ. Adagio – Più andante – Allegro non troppo ma con brio

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［特別協賛］非破壊検査株式会社
［協力］コジマ・コンサートマネジメント
［マネジメント］キョードー

※本公演では読売テレビによる収録が行われます。

山田和樹
（首席客演指揮者）
Kazuki Yamada

首席客演指揮者就任
世界に羽ばたく次代の旗手

©読響

日本が世界に誇る若手のホープが、2018年4月に首席客演指揮者に就任後、初の舞台を迎える。これまでに読響と4度の共演を重ね、いずれの公演でも楽団員と聴衆の心をがっちりと掴んできた。今回取り上げるのはバラエティに富んだ三つのプログラム。気鋭の多面的な才能を知ることができそうだ。

1979年神奈川県生まれ。東京芸術大学指揮科で小林研一郎、松尾葉子に師事。2009年ブザンソン国際指揮者コンクール優勝を機に、ヨーロッパでのキャリアをスタートさせた。これまでにベルリン放送響、サンクトペテルブルク・フィル、パリ管、フィルハーモニア管、BBC響、チェコ・フィルなどへ客演。また、小澤征爾の代役として12年のサイトウ・キネン・フェスティバル松本でオネゲルの劇的オラトリオ〈火刑台上のジャンヌ・ダルク〉を振り、17年には〈魔笛〉でベルリン・コーミッシェ・オーパーにデビュー。18年にはモンテカルロ歌劇場で〈サムソンとデリラ〉を指揮して好評を博した。

スイス・ロマンド管首席客演指揮者を経て、現在はバーミンガム市響の首席客演指揮者、モンテカルロ・フィルの芸術監督兼音楽監督、日本フィル正指揮者、東京混声合唱団音楽監督などの任にある。PENTATONE、EXTONなどから管弦楽曲や合唱曲など、多数のCDをリリースしている。

◇1月8日 名曲シリーズ
◇1月12日 土曜マチネーシリーズ
◇1月13日 日曜マチネーシリーズ
◇1月18日 定期演奏会

サッシャ・ゲッツェル
Sascha Goetzel

ウィーンの俊英が振る
情熱のブラームス

©Ozge Balkan

ウィーンの伝統と革新性を熱いパッションで表す俊英。ウィーン・フィルのヴァイオリン奏者から指揮者に転向し、メータ、ムーティ、小澤征爾らの薫陶（くんとう）を受けて欧州各地で活躍している。今回はブラームスの傑作を入魂のタクトで振り、会場を沸かせるだろう。

1970年ウィーン生まれ。オーストリアのグラーツ音楽大学でヴァイオリンを修めた後、ニューヨークのジュリアード音楽院に留学し、小澤征爾の招きでタングルウッド音楽祭の見習い指揮者を経験した。その後、ウィーン・フィルのヴァイオリン奏者を務めるかたわら、シベリウス・アカデミーで指揮を学び、2001年にウィーン・フォルクスオーパーを振って指揮者デビューを果たした。

これまでにベルリン響、バーミンガム市響、フランス国立管、モスクワ響、トロント響などに客演し、ブッフビンダー、レーピンらと共演した。また、オペラではウィーン国立歌劇場、ロサンゼルス・オペラなどで活躍している。

フィンランドのクオピオ響首席指揮者、バーンスタインが創設したパシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）指揮者などを経て、現在はトルコのボルサン・イスタンブール・フィルの芸術監督兼首席指揮者を務めている。同団との録音はドイツ・グラモフォン及びオニックスより多数リリースされている。

読響とは17年12月の〈第九〉公演以来、3度目の共演。

◇1月31日 大阪定期演奏会

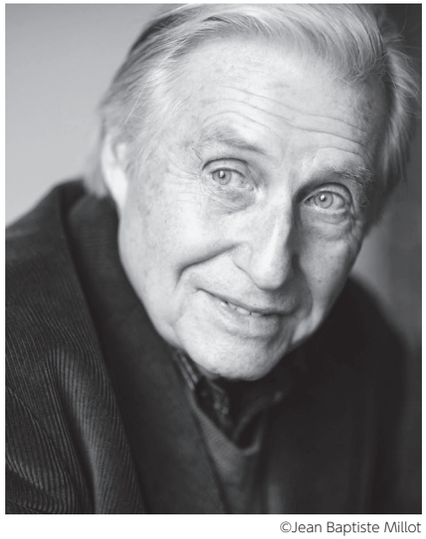
©Marco Borggreve

チェロ ニコラ・アルトシュテット

Cello Nicolas Altstaedt

2010年のルツェルン音楽祭でドゥダメル指揮ウィーン・フィルと共演して注目を浴びた。これまでにマリナー、N.ヤルヴィ、ノリントンらの指揮でウィーン響、ベルリン放送響、バンベルク響などと共演し、サロネン作曲・指揮のチェロ協奏曲の世界初演を務めた。バロックから現代音楽まで幅広いレパートリーを誇り、ソロ、室内楽、指揮でも活躍している。12年からはクレーメルの後継としてロッケンハウス室内楽音楽祭の芸術監督を、14年からはハイドン・フィルの芸術監督を務めている。読響には初登場。

◇1月8日 名曲シリーズ



©Jean Baptiste Millot

ピアノ ホアキン・アチュカロ

Piano Joaquín Achúcarro

1932年スペインのビルバオ生まれ。早くからスペイン、フランス、イタリアなどの国際コンクールで入賞。これまでにアバド、メータ、小澤征爾、シャイー、ラトルらの指揮で、ベルリン・フィル、フランス国立管、BBC響などと共演。数多くの録音を残しており、ロドリーゴのピアノ協奏曲をリリースして話題を呼んだ。スペインでは最も権威ある芸術賞の数々を受賞しており、2003年にはスペイン国王フアン・カルロス1世から国家功労十字勲章を授与された。読響とは1990年、2016年に続き3度目の共演。

◇1月12日 土曜マチネーシリーズ
◇1月13日 日曜マチネーシリーズ

©Marco Borggreve

ピアノ 小菅 優

Piano Yu Kosuge

2005年カーネギーホール、06年ザルツブルク音楽祭でリサイタル・デビューし、10年には同音楽祭でポゴレリッチの代役を務めた。G.アルブレヒト、小澤征爾、ドミトリエフらの指揮で、ベルリン響、北ドイツ放送響などと共演。18年10月、山田和樹指揮モンテカルロ・フィルと、藤倉大のピアノ協奏曲第3番〈インパルス〉を世界初演して絶賛された。様々なベートーヴェンのピアノ付き作品を演奏する「ベートーヴェン詣」に取り組むほか、17年秋からは「水・火・風・大地」をテーマにした新リサイタル・シリーズを開催中。

◇1月18日 定期演奏会

©篠山紀信

ピアノ 小曽根 真

Piano Makoto Ozone

1983年バークリー音楽大学ジャズ作・編曲科を首席で卒業。同年、アルバム「OZONE」で全世界にデビュー。2003年にグラミー賞にノミネート。ゲイリー・バートン、チック・コリア、ブランフォード・マルサリスら世界的ジャズ・プレイヤーと活動をするほか、クラシックでもシカゴ響、ニューヨーク・フィル、北ドイツ放送響、サンフランシスコ響などと共演し、世界的な活躍を続けている。18年3月、初のクラシックアルバムとしてニューヨークフィルとのライブレコーディング「ビヨンド・ボーダーズ」をリリース。

◇1月31日 大阪定期演奏会

1.8［火］

柴田克彦（しばた かつひこ）・音楽ライター

サン＝サーンス

交響曲 第3番 ハ短調 作品78〈オルガン付き〉

作曲：1885～86年／初演：1886年5月19日、ロンドン／演奏時間：約36分

近代フランス音楽の礎（いしずえ）を築いた才人カミーユ・サン＝サーンス（1835～1921）が円熟期に残した、フランスを代表する交響曲の一つ。彼の最後の交響曲でもある。1885年にロンドンのフィルハーモニー協会から委嘱され、1886年4月に完成。5月のロンドン初演と翌年1月のパリ初演で成功を収め、彼は「フランスのベートーヴェン」と讃（たた）えられた。そして本作は、同年7月に亡くなった「F.リストの思い出に」捧げられた。

サン＝サーンスは、25歳の年までに4曲（番号付きは2曲。他に未完の作品が複数ある）の交響曲を完成させていた。1870年代にはリストの影響下で四つの交響詩を発表し、1872年にチェロ協奏曲第1番、1880年にヴァイオリン協奏曲第3番の両名作を作曲。これらを通した習熟の末に、この傑作が生み出された。なお、本作と同時期の1886年3月には、かの〈動物の謝肉祭〉も作曲されている。

本作は、華麗な響きと繊細な美しさが同居した密度の濃い音楽である。最大の特徴は、むろん交響曲へのオルガンの導入。これは、サン＝サーンスがパリ音楽院のオルガン科で学び、パリのマドレーヌ教会のオルガン奏者を約20年間務めていたこと、ロンドンのフィルハーモニー協会の本拠地に立派なオルガン（ただし、初演時には小型の楽器に替えられていたという）があるのを知っていたこと、オルガンを用いたリストの交響詩〈フン族の戦い〉から刺激を受けたことなどが相まっての発想とみられている。実際、各楽章の第2部に登場するオルガンは、管弦楽との対比及び連動の中で比類ない効果を発揮する。さらに見落とせないのが、ピアノの活躍。第2楽章第2部では連弾に発展する同楽器の用法も際立っている。

各楽章が2部に分かれた2楽章構成という変則的な形と、一定の主題が全曲にわたって登場する「循環形式」の活用も特徴的。開始楽章→緩徐（かんじょ）楽章→スケルツォ→フィナーレという一般的な交響曲の流れに沿いながらも各部が切れ目なく続き、第1楽章の第1主題部で提示される循環主題は、様々に変容されながら全編の多くの主題の基幹となっていく。これらがもたらす統一感は練達の極みといえるだろう。

第1楽章 第1部　アダージョ～アレグロ・モデラート。静かな序奏の後、細かく刻まれる第1主題とそこから派生した循環主題（最初の5音は、グレゴリオ聖歌の「怒りの日」と同じ）が示され、歌謡的な第2主題が加わる。通常のソナタ形式にほぼ準じた展開部、再現部が続く。

同 第2部　ポコ・アダージョ。変ニ長調の緩徐部分。オルガンの美しい響きの上で瞑想（めいそう）的な主題が奏され、循環主題に始まるロマン的な中間部が挟まれる。

第2楽章 第1部　アレグロ・モデラート。エネルギッシュな主題に始まるスケルツォ風の部分。ピアノが駆け巡るプレストの部分が2度挟まれる。

同 第2部　マエストーソ～アレグロ。ハ長調の終曲部分。オルガンの輝かしい和音で始まる荘厳な序奏部から、力強い主題と田園風のなめらかな主題を軸にした主部へ移行し、壮大なクライマックスが築かれる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、4手ピアノ、パイプオルガン、弦五部

ラロ

チェロ協奏曲 ニ短調

作曲：1877年／初演：1877年12月9日、パリ／演奏時間：約26分

ロマン派の後期に位置するフランスの作曲家エドゥアール・ラロ（1823～92）は、ヴァイオリンとチェロを学び、弦楽四重奏団を結成して第2ヴァイオリンやヴィオラを担当するなど、当初は弦楽器奏者として活動した。作曲も1845年頃から行っていたが、作品が認められることはほとんどなかった。しかし、そうした経験と祖父がスペイン人であったことによる彼の異国趣味が相まって才能を開花させたのが、1874年に書いた2番目のヴァイオリン協奏曲〈スペイン交響曲〉。75年の同曲の初演で一躍有名になった彼が、続いて77年に生み出したのがこのチェロ協奏曲である。同年（78年と記し

た資料もある）パリにて、曲を献呈したベルギーのチェリスト、アドルフ・フィッシャーの独奏で初演され、サン＝サーンスの第1番と並ぶフランスのチェロ協奏曲の代表作となった。

本作は、やはりスペインの民俗色が漂う、劇的かつ色彩的な音楽。第1楽章が8分の12拍子、第2楽章及び第3楽章の導入部が8分の9拍子で書かれ、チェロの特性を生かした悠々たる楽想を中心に運ばれる。全体を通して、管弦楽に消されないチェロの用法、ソロとバックの絶妙なバランスに、弦楽器に精通したラロの巧みな手腕が発揮されており、中でもチェロの低音域の効果的な活用が際立っている。また、ソロのカデンツァが置かれていない点も特徴的だ。

第1楽章　レント～アレグロ・マエストーソ。導入部はスペイン風の力強いフレーズで始まり、チェロがレチタティーヴォ風のソロを朗々と奏でる。主部は、荘厳な第1主題と叙情的な第2主題を軸に進行し、展開部や再現部にも導入部のフレーズが登場する。

第2楽章　間奏曲、アンダンティーノ・コン・モート。哀感を帯びた主題を中心に運ばれる美しい緩徐楽章。チェロとフルートが軽やかに舞うアレグロ・プレストの部分が挟まれる。

第3楽章　アンダンテ～アレグロ・ヴィヴァーチェ。スペイン情趣を湛（たた）えた導入部から、勢いのある主題を軸にしたロンド形式の主部に移ると、それまでと違った8分の6拍子の活気溢れる音楽が展開。ハバネラの主題とリズミカルな主題が挟まれる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏チェロ

レスピーギ

交響詩〈ローマの祭〉

作曲：1928年／初演：1929年2月21日、ニューヨーク／演奏時間：約24分

オペラの国イタリアにあって、器楽作品の復興に力を注いだ近代の作曲家オットリーノ・レスピーギ（1879～1936）は、サンタ・チェチーリア音楽院の教授就任後に暮らしたローマからインスピレーションを得て、〈ローマの噴水〉（1916年）、〈ローマの松〉（1924年）、〈ローマの祭〉（1928年）と続く「ローマ三部作」を生み出した。イタリアの管弦楽曲の代表作となったこれら三作は、彼が一時期師事したリムスキー＝コルサコフ譲りの色彩的な書法による精緻かつ華麗な音楽で、グレゴリオ聖歌や、中世からルネサンス時代のイタリア音楽の研究の成果も反映されている。

三部作の最後を飾る〈祭〉は、1929年にレスピーギの理解者だったトスカニーニの指揮で初演され、大成功を収めた。本作にはローマを舞台にした四つの祭りが登場。古代から現代に至る歴史の流れと、祭りにおける人間の様相が描かれる。サン＝サーンスの交響曲同様にオルガンとピアノが使用され、様々な打楽器を駆使した絢爛（けんらん）豪華な音楽が展開。マンドリンや3本のトランペットのバンダ（別働隊）も効果を上げる。なおこのバンダは本来、ブッキーナという自然倍音しか出せない古楽器が指定されている。

以下4曲が切れ目なく続く（「　」内は作曲者による情景説明）。

1. チルチェンセス　古代ローマの円形劇場（コロッセオ）で、暴君と呼ばれた皇帝ネロがキリスト教徒を猛獣と戦わせた残忍なショー。「円形大劇場を威嚇するような空が覆っている。今日は民衆の休日『アヴェ・ネローネ（ネロ皇帝万歳）』だ。鉄の扉が開かれ、聖歌と野獣の叫び声が聞こえる。群衆は激高し、殉教者たちの歌が高まるが、騒ぎの中に消えていく」。強烈な咆哮（ほうこう）とバンダのファンファーレに始まる凄まじい喧騒に、重々しい信仰の動機と教徒たちが歌う聖歌が挟まれる。

2. 50年祭　50年に一度行われるローマ法王の大赦の祭り。「巡礼者たちが祈りながら、街道に沿ってゆっくりとやってくる。モンテ・マリオの丘の頂上に達すると、永遠の都ローマが現れる。歓喜の讃歌が起こり、教会はそれに応えて鐘を打ち鳴らす」。舞台は中世、巡礼者たち（クラリネットとファゴット）が聖歌を歌い、祈りの音楽が力を増していく。

3. 10月祭　葡萄の収穫を祝う郊外の祭り。「ローマの諸城での十月祭は葡萄で埋まり、狩りの響き、鐘の音、愛の歌に溢れている。やがて夕暮れの中に、ロマンティックなセレナードが聞こえてくる」。舞台はルネサンス時代、狩りの角笛風のホルンに導かれて農民たちの騒ぎが始まり、熱狂的に高揚。終盤にマンドリンを伴った甘いセレナードが流れる。

4. 主顕祭　東方の三賢人のキリスト礼拝を記念した祭り。「ナヴォナ広場での主顕祭の前夜。増してくる喧騒の中に、サルタレッロ、手回しオルガン、物売りの叫び声、酔っ払いの声が入り乱れ、活気のある歌が流れる」。陽気な農民舞曲「サルタレッロ」が響く中で、前記の場面（特にトロンボーン独奏による酔っぱらいの描写が印象的）が続き、狂喜乱舞状態となる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、D管クラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、中太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン、鈴、ラチェット、シロフォン、グロッケンシュピール、銅鑼、鐘、タヴォレッタ）、マンドリン、ピアノ、オルガン、バンダ（ブッキーナ3）、弦五部

1.12［土］ 1.13［日］

オヤマダアツシ・音楽ライター

ラヴェル
高雅で感傷的なワルツ

作曲：1911年（ピアノ原曲）、1912年（管弦楽編曲）／初演：1911年5月9日、パリ（原曲）、1912年4月22日、パリ（管弦楽編曲）／演奏時間：約16分

グスタフ・マーラーが天に召され、ヨーロッパが少しずつ戦争へと足を進め始めていた1911年。パリでは新感覚派の舞踊団であるバレエ・リュス（ロシア・バレエ団）と、リムスキー＝コルサコフの愛弟子である新進作曲家、イーゴリ・ストラヴィンスキーの出現が話題になっていた。30代半ばを迎えていたモーリス・ラヴェル（1875～1937）が〈高雅で感傷的なワルツ〉と題したピアノ曲を作曲・発表したのは、この年である。

曲の源泉となったのは、ワルツが脚光を浴び始めた19世紀初頭のウィーンでフランツ・シューベルトが作曲した「34の感傷的なワルツ集（D779、作品50）」「高雅なワルツ集／12のワルツ集（D969、作品77）」。ラヴェルはシューベルトを模倣しつつ20世紀流に味付けし、洒落（しゃれ）たワルツの花束風に仕上げたのである。

初演されたのは上記の通りだが（演奏者は曲を献呈されたルイ・オベール）、その演奏会は作曲者を公表せずに音楽を聴くというユニークなものだった。初演後、ラヴェルはナターシャ・トルハノヴァというロシアのダンサーから依頼され、この曲を〈アデライド、または花言葉〉というバレエ音楽に編曲。1912年4月にパリのシャトレ座で舞台初演が行われ（ラヴェル指揮、ラムルー管弦楽団）、以降はコンサート用の管弦楽曲としても広く知られるようになる。

曲はゴージャスな第1のワルツで幕を開け、メランコリックな第2のワルツ、コケティッシュな第3のワルツ……と次々に多彩なワルツが登場。七つのワルツが演奏された後、8番目のワルツではそれまでを回想するように第1～第7ワルツの断片が演奏されて、消え入るように曲を閉じる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール）、ハープ2、チェレスタ、弦五部

ラヴェル
ピアノ協奏曲 ト長調

作曲：1929～31年／初演：1932年1月14日、パリ／演奏時間：約23分

多くの管弦楽曲やピアノ曲を作曲した後、1928年（53歳）にはセンセーショナルな〈ボレロ〉を発表したラヴェル。その後、彼はいよいよ本格的なピアノ＋オーケストラの融合に挑み、二つのピアノ協奏曲をものにする。まずは〈ボレロ〉で奇想天外な発想を世に知らしめた彼らしく、左手のためのピアノ協奏曲を1929～30年に作曲し、1931年11月にウィーンで初演。それと並行して“両手で弾く”ピアノ協奏曲も作曲を進めており、こちらは1932年1月に初演されている（ソリストはマルグリット・ロン、ラヴェル自身の指揮によるラムルー管弦楽団）。それゆえ、この2曲は完全に兄弟作品だといっていいだろう。

この曲の背景にあるのは、ラヴェルが多大な影響を受けたモーツァルトやサン＝サーンスほかの音楽、そして母親の出身地であるバスク地方（現在のフランスとスペインの国境、ピレネー山脈の麓に広がるエリア）の音楽である。作品の構想時、ラヴェルがバスク地方に滞在していたことも見逃せないだろう。ここへ当時ジャズと称されていたブルースや種々のダンス音楽のリズムなどを隠し味的に投入し、さらには聴き手を驚かせるさまざまなオーケストレーション（管弦楽法）のアイデアを採用して作品化。彼はこの協奏曲を初演した年の10月、パリで交通事故に遭い、以降はその後遺症などに苦しみながら1937年末に死去しているため、二つの協奏曲はラヴェルにとってほぼ最後の輝きとなったのだ。

第1楽章　ト長調、ソナタ形式をベースにしながらも狂詩曲風の自由な雰囲気を感じさせる。熱狂的なリズムによるバスクの民俗音楽からヒントを得た陽気な第1主題で幕を開け、気だるいブルース風の第2主題と共に音楽を展開していく。多種多様なオーケストレーションのアイデアにも注目を。

第2楽章　ホ長調、三部形式。ピアノによるサラバンド風の音楽が長く続いた後、オーケストラが加わって美しくも夢幻的な音楽が展開されていく。

第3楽章　ト長調。非常に短いながらもパレードを観ているような楽しみを感じさせ、“才気煥発（かんぱつ）”と評したくなる音楽が展開されていく。

楽器編成／フルート、ピッコロ、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット、エスクラリネット、ファゴット2、ホルン2、トランペット、トロンボーン、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、銅鑼、ウッドブロック、ムチ）、ハープ、弦五部、独奏ピアノ

リムスキー＝コルサコフ

交響組曲〈シェエラザード〉 作品35

作曲：1888年／初演：1888年10月22日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約42分

長く帝政を敷いていたロシアが自国から国際的な作曲家・作品を次々に輩出させ始めたのは、19世紀の中盤。首都サンクトペテルブルクでその中心となっていたのは、ミリイ・バラキレフを中心としたグループであり（「力強い集団」と呼ばれた彼らは、後に国外から「ロシア五人組」と称されることになる）、ニコライ・リムスキー＝コルサコフ（1844～1908）はその一員として多くの名曲を残した。

彼の作風は、高度でかつ実験精神にあふれたオーケストレーションと、その技術を駆使した色彩的な音色を特徴としたものであり、プロコフィエフやストラヴィンスキーらの弟子たちはもちろん、同じ時代を生きた他国の作曲家たちも影響を受けた。ラヴェルもその一人であり、学生時代に書いた管弦楽序曲〈シェエラザード〉や、トリスタン・クリングゾールの詩集『シェエラザード』の数編に曲を付けた同名の歌曲集は、その証である。

リムスキー＝コルサコフの交響組曲は、〈スペイン奇想曲〉（1887年）や序曲〈ロシアの復活祭〉（1888年）などと同時期である1888年に書かれ、同年10月に作曲者が指揮するマリインスキー劇場のオーケストラによって初演された。1886年には盟友ムソルグスキーの未完成作品（歌劇〈ホヴァンシチナ〉、交響詩〈はげ山の一夜〉）などを補筆・編曲して発表。続いてボロディンの未完成作だった歌劇〈イーゴリ公〉も補筆・編曲しており、そうした作業が彼自身の作曲意欲を刺激したのだろう。

四つの交響詩集と称してもよいこの作品だが、リムスキー＝コルサコフは当初、特別な表題や物語などはないと語っていたようだ。しかし1889年に出版されたスコアには、今日の定説となっている『千夜一夜物語（アラビアン・ナイト）』を軸とした物語が掲載され、聴き手への有効なヒントになっている。物語の軸になるのは二人の人物。新しい妃を迎えては初夜を過ごした後で殺してしまう暴君シャリアール王と、彼に嫁ぎながらも数々の寝物語を披露して千一夜を乗り切ったシェエラザード妃。私たちはリムスキー＝コルサコフの機知に富んだ音楽を聴きながら、シャリアール王と同じく、彼女の語る物語や情景を思い浮かべて心を躍らせればいいのである。

第１楽章　海とシンドバッドの船　まず冒頭に登場するのが、全曲を通じて形を変えながら演奏される二つの主題。金管楽器などによる荒々しい「シャリアール王の主題」、そしてヴァイオリン独奏による気高い「シェエラザードの主題」である。この楽章では勇敢な船乗りシンドバッドの冒険物語がシェエラザードによって語られるが、オーケストラが波の揺れを描写したり、シェエラザードの話に聞き入るシャリアール王を表現していく。

第２楽章　カランダール王子の物語　とある国の王子でありながら、いまでは諸国を行脚する僧となった主人公の物語。ファゴット（さらにオーボエ）が彼の性格や言動を表すような主題を演奏。突然、トロンボーンが天からの啓示のような力強い主題を演奏し、音楽は躍動的に。スケルツォまたは行進曲調の中に、クラリネットやファゴットのカデンツァを挟みながらドラマを作り上げていく。

第３楽章　若い王子と王女　高貴な二人の様子を表現するような主題で始まり、可愛らしいダンスを思わせるクラリネットのモチーフを加えながら音楽は広がりをみせる。後半になると、シェエラザードの主題が何かを訴えかけるように挟み込まれる一場面も。

第４楽章　バグダッドの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破、終曲　二つの主題が演奏された後、跳躍リズムによる「バグダッドの祭り」へ。第2および第3楽章の主題が回想され、音楽が盛り上がりの頂点に達すると、第1楽章における「海」の音楽が壮大に演奏される。しかし、船は岩に乗り上げて難破（音楽もクラッシュ）。シェエラザードがシャリアール王の怒りを鎮め、平和なフィナーレを迎える。

楽器編成／フルート２（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ２（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、銅鑼）、ハープ、弦五部

〈シェエラザード〉ソロ・ヴァイオリン

小森谷巧　Takumi Komoriya（読響コンサートマスター）

桐朋学園ディプロマコース、ウィーン国立音大を経て、英国王立音学院の演奏家ディプロマを首席で卒業。リピツァ・ヴァイオリンコンクール、フムル国際コンクールなどで入賞。欧州各地でソロ活動を展開し、高い評価を得る。1987年東京交響楽団に入団しコンサートマスターとして活躍後、99年読響のコンサートマスターに就任。CDも多数リリース。長きにわたり室内楽、各地の音楽祭で活躍。現在、昭和音楽大学教授を務めている。

1.18［金］

西 耕一（にし こういち）・音楽評論家
※藤倉大の作品を除く

諸井三郎
交響的断章

作曲：1928年／初演：1928年11月9日、東京／演奏時間：約14分

諸井三郎（1903～77）は、詩や物語による歌の作曲が殆どであった我が国において、交響曲やソナタを頂点とする論理的な構築による器楽曲の創作を定着させた最初の作曲家といえる。中でも五つの交響曲や七つの協奏曲、ピアノ、ヴァイオリンだけでなく、ヴィオラやホルンのためのソナタなどは特筆される。教え子には、柴田南雄、入野義朗、木下忠司、團伊玖磨、矢代秋雄、渡辺宙明らがおり、いずれも教育・作曲の両面で日本にとって重要な人材となっている。

諸井が作曲家を志したのは、中学3年のときにベートーヴェンのピアノ・ソナタに感銘を受けてから。それまでは兄にピアノを習い、中学以来の学友である中島健蔵らとコンサートへも通っていた。東京帝国大学文学部に入学してからは、河上徹太郎、小林秀雄、大岡昇平、中原中也らとも交流を深め、7人の仲間と音楽グループ「スルヤ（インドの太陽神の意味）」を1927年に結成。4年間に、諸井の作品を中心にした演奏会を7回行った。週1回の例会も開催され、多くの芸術家が集い、その中には島崎藤村もいた。諸井への世間の注目も大きなもので、信時潔は「高雅なる和声と秩序ある旋律〈中略〉独自の境地」と推薦を寄せ、今東光は読売新聞に「日記を書くように作曲をする男が現れた」と書いた。

〈交響的断章〉は1928年のスルヤ第3回演奏会のために作曲され、同じく諸井のピアノ協奏曲嬰ヘ短調と共に国民交響楽団の演奏で初演された。諸井が25歳、東大卒業時の作品である。独学による作曲の限界を感じてドイツへ留学して徹底的に研鑽を積むのはこの後、1932年からである。それゆえか厳格な構築美の片鱗はあるものの、絵巻物を読み進めるように音楽が変容してゆき、上質な後期ロマン派の交響詩を思わせる。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

藤倉 大
ピアノ協奏曲 第3番〈インパルス〉
（モンテカルロ・フィル、スイス・ロマンド管との共同委嘱／日本初演）

作曲：2017～18年／初演：2018年10月5日、モンテカルロ／演奏時間：約24分

これは僕にとって三つ目のピアノ協奏曲。オーケストラがピアノに付ける、という感じではなく、ピアノがどんな繊細な音で弾いてもそれに反応するのがオーケストラ。

オーケストラはピアノのペダルのような、でも単に弾いた音が引っ張られるのではなく、そこからまた生き物のように動き始めたり、まさに魔法のペダル、魔法の残響、といった感じでしょうか。

このピアノ協奏曲は他の二つの協奏曲と違い、全体的に気持ち良い感覚、というか、オルガズミックな感覚がずっと持続する部分もあり、片手だけの単旋律をピアノが弾いたと思ったら、ピアノの最低音とドラムが絡むところがあり、ピアノの最高音とオーケストラが即座に反応する部分などもあります。

インパルス、それは体内の細胞レベルで繰り返される電気信号。

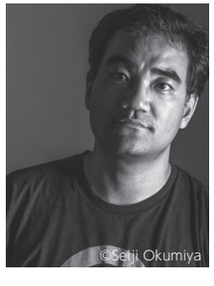
音楽は常にインパルシヴ（衝動的）に動き始める。

ピアノがインパルス（信号）としてオーケストラに信号を送り、インパルシヴ（衝動的）にオーケストラが即座に反応。ただし忠実には反応しない。

今度はそのオーケストラのインパルス（信号）としての反応に、ピアノがまた新たなインパルス（信号）をインパルシヴ（衝動的）に発し……というのが繰り返される作品です。

藤倉 大

楽器編成／フルート（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2（コントラファゴット持替）、ホルン2、トランペット2、打楽器（大太鼓、コンガ、シロフォン、ヴィブラフォン）、弦五部、独奏ピアノ



藤倉 大 Dai Fujikura

1977年大阪生まれ。15歳で渡英し、ジョージ・ベンジャミンらに師事。ザルツブルク音楽祭、BBCプロムス、シカゴ響などから作品を委嘱され、国際的な共同委嘱もますます増えている。2019年はオペラ〈ソラリス〉組曲版世界初演、アーティスティック・ディレクターを務める新しい音のフェスティバル「ボンクリ・フェス2019」などが控える。2017年ヴェネツィア・ビエンナーレ音楽部門銀獅子賞受賞。録音多数。

ワーグナー

舞台神聖祭典劇〈パルジファル〉から第1幕への前奏曲

作曲：1877～82年／初演：1882年7月26日、バイロイト／演奏時間：約13分

生涯に13作ものオペラを書いたリヒャルト・ワーグナー（1813～83）にとって、〈パルジファル〉は最後の作品であり、自らの作品上演のために設計、建築されたバイロイト祝祭劇場で上演するために作曲された。基本的な構想は40年前からあったとも言われ、ワーグナー自身、この作品をそれまでの楽劇とは区別しており、カトリックやプロテスタントだけでなく、東洋思想や仏教までも取り入れた「舞台神聖祭典劇」という題が与えられている。それゆえに、ワーグナーは一般劇場での上演を禁止したほどであり、興行権が消失する1913年まで演奏会形式や一部の例外を除いてバイロイト祝祭劇場でのみ独占的に演奏されていた。

〈パルジファル〉は無垢（むく）な青年パルジファルが魔法使いクリングゾルに奪われた聖槍を取り返すという物語であるが、そこにまつわる宗教的な背景や事象が複雑に絡み合い、神秘的で壮大な世界観を醸し出している。

ワーグナーは作品全体を一つの大きな曲として捉え、旋律がどこまでも音の流れとして発展して、オペラが終わる最後の音まで続く「無限旋律」や、頻繁な転調や半音階の使用も行っている。最初に管弦楽部分を作曲してから、その上で声楽パートを作曲するという手法も使って、管弦楽と声楽が渾然一体となった官能的で濃密な響きを持った世界が展開されている。こうした楽劇の手法は〈パルジファル〉で究極まで突きつめられ、ドビュッシーもバイロイト祝祭劇場で〈パルジファル〉を聴いてその音色の変化や音響のうつろいに酔いしれたという。

今回は“第1幕への前奏曲”のみの演奏となるが、そこには、この作品で重要なライトモチーフ（短い示導動機）がちりばめられている。変イ長調でゆるやかにあらわれる木管と弦楽による「聖餐（せいさん）の動機」では弱音器をつけた弦の音色が微細に変化し、「聖槍の動機」や「痛み」の半音階、次第に高揚する「聖杯の動機」、金管による荘厳な「信仰の動機」なども聴かれ、最後にこれらが「聖餐の動機」に融合して静かに終わる。

楽器編成／フルート3、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

スクリャービン

交響曲 第4番〈法悦の詩〉 作品54

作曲：1905～07年／初演：1908年12月10日、ニューヨーク／演奏時間：約22分

アレクサンドル・スクリャービン（1872～1915）は、幼少期から楽才を認められモスクワ音楽院で学んだ。同級生にはラフマニノフやメトネルがおり、ピアニストとしての将来を嘱望されていたが、20歳のときに、リストのピアノ曲を練習中に右手を痛めてしまう。この事故をスクリャービン自身も生涯最大の不幸であり、挫折であったと回想しているが、これを契機に作曲への道を開き、そして精神世界への傾倒に向かったとされる。

43歳で亡くなるまでに残した作品は殆（ほとん）どがピアノ曲であり、管弦楽曲は五つの交響曲を中心として数えるほどしかない。ロマンティックな初期の作品を経て、ワーグナーに影響を受け、次第にニーチェ哲学や、ブラヴァツキー夫人の神智学などに傾倒して、全宇宙の根底にある絶対的な神性と人間は本質的に同一であるという考え方に共感を持つようになる。それらは神秘和音や色と音を関連させた色光ピアノの導入などへ発展。自分と神の同一性を信じて、芸術によって世界を変革させることさえ出来ると考えて作曲を行った。特に交響曲の第3番〈神聖なる詩〉、第4番〈法悦の詩〉、第5番〈プロメテ－火の詩〉などにその性格が強くあらわれている。

今回演奏される〈法悦の詩〉は単一楽章、序奏付きの自由なソナタ形式。

この曲における「法悦」とは、音楽による大きな精神の高揚によって、シャーマンのトランス状態のような感覚、つまりは神と一体化して絶対的な境地に至るイメージと解釈できるだろう。音楽によって自分も他者も世界も宇宙も、すべてが同一化する。仏教の涅槃（ねはん）の境地とも言えようか……。

曲は、木管楽器や弦楽器の憂いを帯びた序奏から波打つようにオーケストラへ広がってゆく。ヴァイオリン・ソロやクラリネットが移ろいを聴かせつつ、管楽器の華やかなきらめきが高まりを支える。ワーグナーの無限旋律を思わせる息の長い極彩色の管弦楽法が、濃密な時間の流れを引き出す。最終的には5本のトランペット、8本のホルン、オルガンや鐘も加わって四管編成のオーケストラが一斉に鳴り響く圧倒的なクライマックスとなる。

楽器編成／フルート3、ピッコロ、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン8、トランペット5、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、トライアングル、サスペンデッド・シンバル、グロッケンシュピール、銅鑼、鐘）、ハープ2、チェレスタ、オルガン、弦五部

1.31［木］

江藤光紀（えとう みつのり）・音楽評論家

ワーグナー

楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉第1幕への前奏曲

作曲：1862〜67年／初演：1868年6月21日、ミュンヘン王立宮廷劇場／演奏時間：約9分

媚薬をめぐる男女の愛の葛藤を描いた〈トリスタンとイゾルデ〉を完成したリヒャルト・ワーグナー（1813〜83）が、次に手掛けた楽劇が〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉である。南ドイツ・バイエルン州の古都ニュルンベルクに実在した人物を題材に、ワーグナーは彼にしては珍しいハッピーエンドの物語を作った（ワーグナーは台本も自ら手掛けた）。

中世ドイツにおいて騎士道精神に基づく恋愛詩を歌っていた吟遊詩人が、都市に定住しギルド的な職能組合に入っていったのがマイスタージンガーだと考えられている。彼らは手工業者として働きながら、仕事以外でも詩吟や歌の力量を競い合ったのである。

あらすじは次のようなもの。ニュルンベルクにやってきた騎士ヴァルターは、金細工師の娘エファに一目惚れする。明日の歌合戦に勝利すればエファと結ばれると知ったヴァルターは、恋敵の妨害などを受けながらも、天賦の才によって歌合戦に勝利してエファを得、新たなマイスターになる。

ワーグナーは楽劇を開始するにあたって、単にオペラのテーマをつなぎ合わせた序曲ではなく、作品の精神を凝縮し本編へとスムースに接続する前奏曲を置いており、この曲もそうした考えに沿って編まれている。

冒頭、金管楽器を中心に歌いだされる壮麗な旋律はマイスタージンガーの動機で、祝祭的な雰囲気の中で踏みしめるように進む行進の動機や、優美にうねりながら上行する芸術の動機などが次々に示される。ややあってヴァイオリンに愛の動機、さらに情熱や明朗さの動機など作品の理念に関係するテーマが現れ、最後にはマイスタージンガーの動機が他の動機と組み合わされつつ力強く奏されて全曲を結ぶ。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル）、ハープ、弦五部

モーツァルト

ピアノ協奏曲 第23番 イ長調 K.488

作曲：1784?〜86年／初演：1786年3月、ウィーン／演奏時間：約30分

ザルツブルクの大司教とぶつかったことで宮廷音楽家の任を解かれたヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756〜91）は、ウィーンでフリーランスとして生きていく道を選ぶ。そこで彼が武器としたのは、ピアニストと作曲家という二つの技量を同時に示すことのできるピアノ協奏曲だった。ウィーンは地の利もあって、シーズンになると自国のみならず遠くはロシアに至るまで、各地から裕福な貴族が集まった。モーツァルトは彼らを顧客として予約演奏家を開き人気を博した。それが絶頂期を迎える1784年から86年にかけては、こうした演奏会のために12曲もの協奏曲が書かれたのである。これらはピアノの書法の面でもスタイル上でも、ハイドンを継承し古典派の最高峰を示している。

1786年の四旬節（復活祭前の1か月半程度の期間）に初演された第23番は、特にピアノ・パートが入念に組み立てられていることが特徴で、技量を即興的に示すことを旨とするカデンツァもスコアに書き込まれている。またオーケストレーションの面では、オーボエの代わりにクラリネットが加えられ、トランペットやティンパニが削られて、より柔らかで心地よいサウンドが目指されている。親しみやすく表情豊かなメロディーがピアノの華やかな技巧によって彩られ、巧みな管弦楽法で豊かな着想が流れの中に自然に組み込まれる。その完成度の高さによって、モーツァルトの中でもひときわ人気の高い協奏曲である。

第1楽章　アレグロ　シンプルな第1主題と行進曲調のリズムを含む第2主題で構成される。展開部では木管楽器が新しいテーマを歌いだし、ピアノと弦がそよ風のように応答する。

第2楽章　アダージョ　8分の6拍子のシチリアーノのリズムに乗って憂いに満ちた旋律が歌われ、オーケストラがメランコリックに返す。中間部はフルートとクラリネットに導かれて夢幻的な世界が出現する。

第3楽章　アレグロ・アッサイ　ピアノがロンド主題を歌いだしオーケストラがなぞっていく。反復されるロンド主題の合間には多彩な性格をもった副主題が現れる。

楽器編成／フルート、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独奏ピアノ

ブラームス

交響曲 第1番 ハ短調 作品68

作曲：1855〜76年／初演：76年11月4日、カールスルーエ／演奏時間：約45分

1855年にシューマンの〈マンフレッド序曲〉を聴いたことがきっかけとなり、ヨハネス・ブラームス（1833〜97）は交響曲の作曲に向かうが、主に自身の管弦楽法の力量についての疑念から挫折する。その後、〈ハイドンの主題による変奏曲〉などで経験を積んだことで、ブラームスは書きつないできた交響曲に1874年ごろから本格的に着手、76年に完成させる。着想当時20代だった作曲家は、43歳になっていた。

元来が熟考型とはいえ構想に21年もの時間を要したのは、先行者ベートーヴェンがあまりにも優れていたからだろう。発表時、ベートーヴェンの没後半世紀が過ぎようとしていたが、創作のトレンドも交響詩などに移り、交響曲というジャンル自体があまり顧みられなくなっていた。堂々たる貫禄をもったブラームスの「第1」は、同時代の指揮者ハンス・フォン・ビューローが「ベートーヴェンの第10」と呼ぶなど高く評価され、ジャンルが活性化されたという意味でも、果たした役割は大きかったと言えよう。

重苦しく始まり喜びに満ちたエンディングへと至る「暗から明」という全体設計図をはじめ、確かにここにはベートーヴェンの影が随所にみられる。しかしまた、重厚な書法やそれを破って噴き上げる情熱は、ブラームスにしか書きえないものでもある。

第1楽章　ウン・ポーコ・ソステヌート〜アレグロ　半音階を含みながらじりじりと上行するヴァイオリンとチェロが、下行音型と激しく対峙する。序奏部の緊張は交響曲全体の“暗”を象徴していると言えよう。アレグロ主部は勇壮な主題をもとに進んでいく。

第2楽章　アンダンテ・ソステヌート　三部形式。のどかな主題で始まり、ヴァイオリンやホルンが美しく彩りを加える。

第3楽章　ウン・ポコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ　優雅で簡潔な楽章。中間部は木管楽器に導かれ、厚みを増しながら躍動する。

第4楽章　アダージョ〜ピウ・アンダンテ〜アレグロ・ノン・トロッポ・マ・コン・ブリオ　悲痛な序奏の後、ホルンの角笛が歓喜の訪れを予感させる。アレグロ・ノン・トロッポに入ると弦にたっぷりとした主題が現れ、輝かしいコーダへと突き進んでいく。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部